

師範學校

國文教科書

本科用

修正十六版

卷五

375.9
Y019
資料室

42572

教科書文庫

4
810
51-1916
20003 02271

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

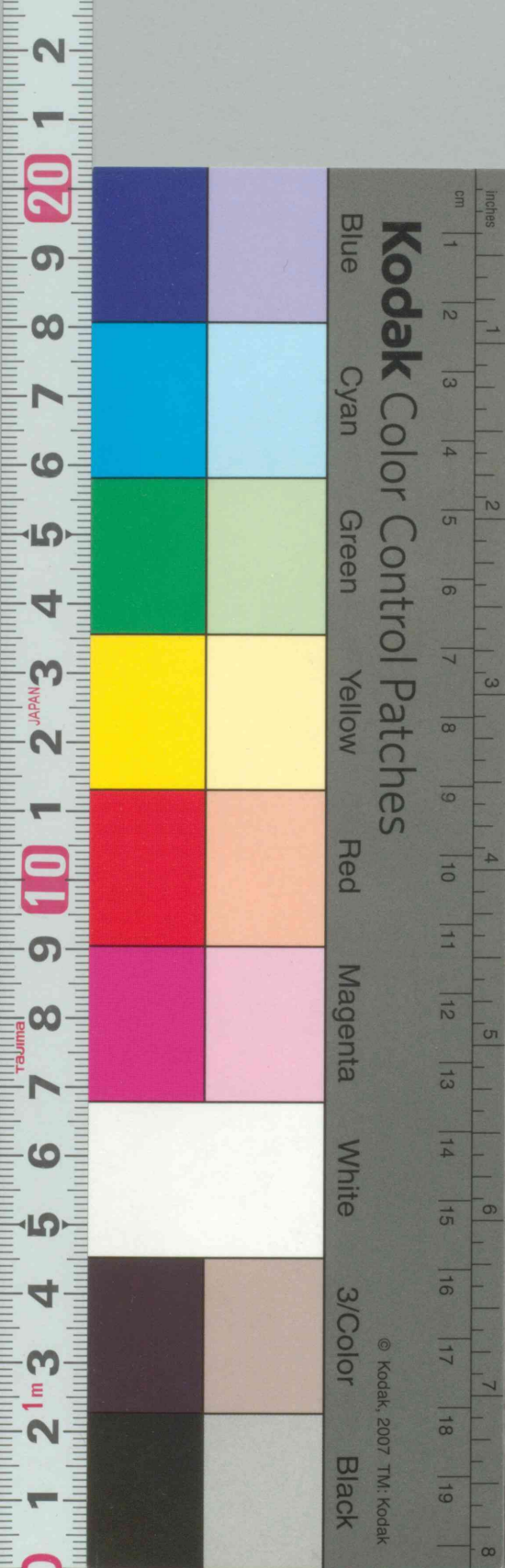


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

375.9

Y019

文部省檢定
師範學校國語教科書
大正五年一月二十日

吉田彌平編

本科用

師範學校
國文教科書

東京 光風館藏版

卷五

八	百蟲譜……………	横井也有	壺
九	知足菴の記……………	村田春海	吾
一〇	西行法師……………	上田秋成	壺
一一	江戸時代の文學……………	藤岡作太郎	壺
一二	不愠……………	幸田露伴	夫
一三	不二の神山その一……………	遅塚麗水	八五
一四	不二の神山その二……………	遅塚麗水	九
一五	國體の精華……………	穂積八束	九
一六	日本畫……………	藤岡作太郎	一〇八
一七	月雪花(口語文)……………	芳賀矢一	一二六

一八	比良の山風(和歌)……………		一二七
一九	新島守……………		一三〇
二〇	日野の閑居……………	鴨	長明
二一	羽衣(謠曲)……………		一四六
二二	鎌倉室町時代の文學……………		一五六

師範學校 國文教科書 本科用卷五目次終



師範學校 國文教科書 本科用卷五

姓連 通動
宗暢 流傳

一 松下村塾

松下村塾、吾人はこの名を聞く毎に、教育上、箇人の勢力の偉大なるに想到るを禁ずる能はず。松陰が村塾を創めし時、歳纔かに二十六。その死、三十歳を去ること四年に満たず。村塾矮にして陋。室唯二、六疊と八疊とのみ。松陰、居常、弟子と共にその中に起臥し、飲食し、教授し、談論せり。かゝる少壯

三河
山形
山形
山形
山形
山形
山形
山形
山形
山形

天^{*}之生^レ此^レ民^ニ也^ニ使^レ先^ニ知^ル覺^ス後^ニ知^ル使^レ先^ニ覺^ス後^ニ覺^ス也^ニ予^ハ天^ノ民^ノ之^レ先^ニ覺^ス者^ト也^ニ予^ハ將^シ以^テ斯^ノ道^ヲ覺^スス^ル民^ト也^ニ非^ズ予^ハ覺^ス之^レ而^シ誰^カ也^ニ

の身を以て、かゝる矮屋の下に於て、かゝる短日月の間に、濟々たる多士を收容し、養成し、感化して、以て維新の宏謨を翼賛するに至らしめたるは、殆ど一の奇蹟なるものゝ如し。「如今廊廟棟梁器、多是松門受教人。」といふもの、決して虚語にあらざるを見るなり。昔、唐の興りし時、賢臣多く文中子の門に出でたりと稱す。然れども、これを松陰が感化の大なるに比すれば、猶其の及ばざるものあるを覺ゆ。松陰は斯民の先覺者を以て自ら任ぜり。彼は如何にして天下を拯はんとせしぞ。古來の英雄、多くは

儒教
王道
王道
王道
王道
王道
王道
王道
王道
王道



(藏三庫田吉) 陰 松 田 吉

手を以て天下を拯へり。手は術なり。松陰は曰く、「我は道を以て天下を拯はん。王霸の岐るゝ所は道と手との相違のみ。術を以て人を弄し、智を以て世

を馭し、自己の誠意に基づかず、一身の實行に本づかざるは、皆道を以てするにあらず、手を以てするなり」と。

嗚呼、今の時は如何なる時ぞ。吾人、生れて幸に振古未曾有の盛世に遭逢し、まのあたり國運の隆々とし

て興起するを見るを得たり。思ふに、帝國發展の道は固より一にして足らずといへども、その基礎たるものは他にあらず、實に教育の進歩にあるのみ。是正に古今東西の歴史が吾人に告ぐる所なり。吾人已に志を立て、一身を教育の事業に捧げんとするに際し、遙かに前程を望めば、固にその任の重くして道の遠きを知ると雖も、然れども、村塾の成果を顧みて、箇人の勢力の偉大なるを想へば、また私かに期する所なくんばあらざるなり。(和近世教育史に據る)

二 妹にさとす

吉田 松陰

この間は御文下され、観音様の御洗米、三日の精進にいたゞき候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進潔齋などは、随分心のかたまり候ものにてよろしき事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候へば、酒肴ども一向たべ申さず候。その間、一度靈神様御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にもこれなく、御深切の事に候へば相果したく存候

*安政六年四月十三日松陰が野山の獄に在りて長妹千代子に與へしもの。

野村主日

へども、當所にては、あたりまへの精進の外にまた精進と申候うては、連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候につき、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日よりさいはひ精進日なれば、その日一日にいたゞき申候。

そもく、觀音様信仰せよとの事は定めし禍をよけ候ためなるべく、これには大いに論のある事に候へば、委細申進ずべく候。法華經第二十五の卷普門品（註）と申すに、觀音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、

*方言、微塵などの意。

繩目にかゝり候へば忽ちぶつくと繩が切れ、人屋へ捕はれ候へば忽ち錠鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんぢ（註）に折るゝなど申してこれあり候。これは、拙者江戸の人屋にてこの經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。

さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘小乗と二つに分ちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乗に

大乘教
佛教の理
佛の教は、
空、無、有、
の理、
を、
示、
す、
に、
由、
り、
す、
。

五三場
極一鳥

て申候へば、観音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむることに御座候。これは大いに信を起さするためなり。信を起すと、一心にありがたい事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なきことにて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候うてもちつとも頓著なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候ゆゑ、世の中に、如何に難題苦患の來るとも、それに退轉して不忠不孝無禮無道等仕る氣遣ひはなし。されど、初より凡

小日轉大角
居心

*法華經第七
化城喻品。

- 一 士道莫大於義我因勇行
- 因義長
- 一 士行以質實不欺為要以仍
- 詐文過為恥光明至大皆由
- 是出
- 一 成德達材師恩友益多
- 百故君子慎交游
- 一 死而後已四字言簡而義
- 該些惡果決確不可拔
- 者舍是無術也

二十面極志

(内の則七規士) 讀筆 陰松田 音

夫に、一心不亂の不
退轉のと申しきか
せても、少しも耳に
入らぬものゆゑに、
かりに観音様を拵
へて人の信を起さ
せ候教に御座候。
これを方便とも申
候。これにつきて、
法華經に都上りの

二 妹にさとす

九

諭これあり至極面白く候へども、事長ければ略し申候。

さてまた大乘と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候うても、立身出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が^{*}天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲を發し、生老病死がこ

^{*}迦比羅城主
淨飯王。

の世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまざると志を立て、年二十五の時位を棄て、山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候りて三十出山とて、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出て來て、それより世の人を教化せられたり。これが即ち出世法なり。故に、出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、即ちこの世の人を濟度することに御座候。

さてその死なずと申すは、近く申さば釋迦の孔子のと申す方々は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすればありがたがりもし、畏れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は、刃ものに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀のちんぢに折れたる證據なり。

さてまた「禍福繩の如し」といふ事を御悟なるが

淮南子に見ゆ。

宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。このわけは物知に問うて知るべし。拙者など、人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世へも残り、かつぐ死なぬ人々の仲間入りも出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出て候へば、また如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論、その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし、何の

效驗もなき事に、観音に頼みて福を求むるやうの事は、必ずく、無益に存候。

尤も右の通りに申候へば、身勝手なる申分不孝なる申分と御存あるべきか、こゝにまた論あり。

易の道は満盈と申すことを大いに嫌ふなり。

御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は夭折、敏は

啞子、ふぎまのわるきやうなるものなれど、あと

四人はいづれも可なりに世を渡られ、特に兄様

そもじ、小田村は兩人づつも子供があれば不足

は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家

天道虧^レ盈
而益^レ謙。
杉民治
吉田寅次郎
杉千代子
（兄玉兵衛門妻）
杉壽子
（小田村素太郎妻）
杉艶子（天）
杉美和子
（久阪義助妻）
杉敏三郎

を見くらべよ。これ程にも参らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にて、高須などにて、も、兄弟の内にはわるき人も随分あるなり。然れば父母、兄弟の代りに拙者、艶、敏の三人が禍を引受くるにこそと思ひ候は、父母様の御心も濟まる、譯には候はずや。かつ杉は随分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、卻つて杉が氣遣なるものなり。拙者身の上は前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は随分あれど、杉は今にては御父子とも御

*杉常道隱逸の地。萩城の東方護國山麓に在り。

役にて何の不足もなき中なれば、子供等がいつもこの様なるものと思ひて、昔山宅にて父様母様の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ、氣遣ひなるものにては候はずや。去年も端午に客の多きを、人はめでたしくと嬉しき顔をすれど、拙者は何分先の先が氣遣ひにてたまらぬゆゑ、始終稽古場にかゝみて、人の知らぬ處にてはひとり落涙したる程の事なりき。

*兄民治の子。

もしや、萬一、小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危しく。父母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にてすら山宅の事はよくは覺えて居るまじ。まして久阪などは猶以ての事。されば、拙者の氣遣ひに觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂は苦の種、福は禍の本」と申す事をとくと申聞かする方が肝要なり。なほまた一つ、拙者不幸ながら孝に當ることあり。兄弟のうち一人にてもふぎまのわるき

人あれば、あとの兄弟は自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者のかほりに父母様へ孝行してくるゝがよし。さすれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、はては父母様の御仕合せ、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれ程めてたき事はなきにあらずや。よくよく御勤辨候うて、小田村久阪なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、

心學本なりと、をりく御見候へかし。心學本に、

のどけさよ、ねがひなき身の神まうて、神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。

十三日認。

俗簡裸輯

三 死と永生

高山樗牛

死は生きとし生けるものゝ免るべからざる運命なり。それ唯免るべからざる運命なり、故に又避くべからざる問題なり。されど生ををしむ人はあれど

も死ををしむ人は少く、生に就いて慮る人はあれども死に就いて考ふる人は稀なり。いぶかしからずや。

如何にして生くべきか、是、人生の大いなる疑問なり。然れども如何にして死すべきかは更に大いなる疑問にはあらざるべきか。吾等は歴史を讀みて大いなる宗教の起るを見たり。されど宗教とは生きんが爲の教にあらざして、死せんが爲の悟なり。釋迦は人生の四苦よんくるに感じて解脱の途を説きぬ。耶蘇は同胞の宿罪しよくざいを贖あがなりて永生の道を開きぬ。解脱や永

生老病死。

生や死を外にして何の意義かある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦是に外ならざるなり。天地人生の理法を明らかにするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とは所詮は死を安からしむるの謂にあらざるや。道德は現世の爲にのみ存するものにあらず。名譽の不朽を思ひ、事業の永遠を言はば、是、即ち死後の世界を言ふなり。あはれ、其の生を見て其の死を見ざる者は人生の根本を遺れたり。死はすべての物の終にして、又すべての物の始なればなり。されば人々死を考へよ。死を

考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり。如何にして生くべきかの問題は、即ち如何にして死すべきかの問題なり。死を考ふるは死滅を考ふるにあらずして永生を考ふるなり。されば吾等は生きざるべからず、永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり。されど吾らは死を超絶して其の永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか。人生究竟の問題こゝに集る。

世に神に禱りて永生を求むるものあり。佛に願ふものは人生の倏忽を歎きて涅槃の寂寞を求む。されど形體を離れて魂魄なきを如何にすべき。其の墳墓を壯大にし、金を鏤め、石に刻して名の後世に傳はらんことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して、墓標獨り全きを得べしや否や。かくの如きは永生の道にあらざるなり。まことの永生は名によりて生くるにあらずして事によりて生くるなり。儒教の存する所、今尙孔子あらざるはなく、佛寺の建つ所、到る處に釋迦あり、耶蘇

一七六—一七九。

一七〇—一七九。

は十字架にかゝれりと雖も今尙基督教徒の命なり、楠公の史蹟に感激する者の胸には楠公其の人の生命あり、蒸氣機關の動く處にはワットの血液あり、電氣の線のかゝるところは即ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は時と共に深さを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々汨々として遂に世界を動かさずんば已まざるべし。十九世紀の文明はかくの如き幾多永生の結果に外ならざるなり。

諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。其の年の弱きを以て早しとするなかれ。死を思はずして生きたるは空しく生きたるなり。其の死をして憾なからしめんと欲せずして獨り其の生の完からんを望むは、これ目的なくして道を歩むなり。死を思ふは即ち永生を思ふなり。而して最もよく此の問題を解釋したるものは哲人傑士なり。(樗牛全集)

四 浦島前曲

坪内逍遙

寄せ返る神代ながらの浪の音、塵の世遠き調かな。

老幼何れの時も定まらぬ
機あはれ
唯其の心一輪
嗚

一の古より、
叙由大
二の返りぬ

*渤海之東有大壑焉其下無底名曰歸墟。

夫渤海の東幾億萬里に、際涯も知らぬ壑あるを名づけて歸墟といふとかや。八紘九野の水盡し、空に溢る、天河の流の限り注げども、無増無減と唐土の至人がたとへ今こゝに見る目はるけき大海原。北を望めば渺々と水や空なる沖つ浪、煙る碧の蒼茫と霞むを見れば、三つ五つ溶けて消えゆく片帆影。それかあらぬか、帆影にあらぬ沖の鷗のむらくはつと立つ水煙、寄せては返る浪がしら。其の八重潮のをちかたや、實にも不老の神人の棲むてふ三つの島根かも。

さて西岸は名にし負ふ夕日が浦に秋寂びて、磯邊に寄するといろ浪。岩に碎けて裂けて散る水の行くへの悠々と、且に洗ふ高麗の岸、夕陽も其處に夜の殿。錦繡の帳暮れ行く中空に、誰が釣舟の玻璃のともしび白々と、裾の紫色あせて又染めかはる空模様。あれ何時の間に一つ星、雲の眞袖の綻見せて斑曇。變るは秋の空の癖、しづ心なき風雲や。蟹の小舟のとりぐに歸りを急ぐ櫓拍子に、船歌絡るかりがねの聲も亂れて、浦の門に岩波騒ぐ夕嵐すさまじかりける風情なり。(新曲浦島)

五 現代の文學

佐々政一

維新の偉業正に成りて、開國の國は一たび定るや、世間は西洋の物質的文明の輸入に急にして、和漢の學術技藝を顧るに違あらざりき。況や美術文藝のことの如きは、全く無用の長物とせられて、幾多の國寶は破棄せられ、無數の古典は廢紙となりぬ。此の間にあつて纔かに文學の微光を存せしものは獨り新聞紙なりき。

新聞紙の刊行は、これ亦西洋に學びしものにして、當

初は専ら政治論の機關たり、實用功利の論に非ざれば、以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。されど、普通教育の制度漸く國內に普くして、文學の知識が中流以下の社會に擴張せらるゝと共に、新聞紙の經營者も、亦此等の讀者に對して、その娛樂となるべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知りぬ。かくて、幕末以降、久しく失意の地にありし戲作者が、所謂續き物と稱する合卷風の小説を紙上に掲げ初めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。從來、筆を政治論にのみ執りたりし人々も、此の種の

文藝の人心に影響することの速かなるを認めて、或は英佛の政治小説を翻譯し、或は新に架空の脚色を立て、自家の主張を具體的に説明せんことを企てたり。佳人之奇遇、雪中梅、經國美談等は當時最も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調時に青年者流を感奮興起せしむるものなきにあらざりしかど、その豪放粗大の文は未だ人情の機微に入らず、眞に文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。

さもあれ、明治は既に十七八年を経たり、西洋の學術も技藝も稍咀嚼せられたり。世の先覺者はかの徒

に物質の皮相にのみ腐心するの愚なるを悟りぬ。

文藝美術の評價も日に漸く高からんとせり。この勢に乗じて、坪内逍遙等が文學論の出づるあり、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり、在來の戲作者系の人々もこれに呼應して立てり。こゝに謂はゆる才筆家にもあらず、政論家にもあらず、熱誠なる態度を以て、直ちに人生を描破せんとする者は、將に踵を接して出でんとせるなり。

思ふに新文藝の勃興は、半ば西洋文藝によりて啓發せられたり。されども、他の一半は我が國の古文學

に淵源せるものなることを忘るべからず。蓋し維新以來萌し來れる西洋文明謳歌主義は此に其の極に達して、その反動たる國粹保存論は盛に唱道せられ、國語教育の奨励、古文學の研究が、隆昌を極めしは、あたかもこの頃なりき。されば、新文藝の先達は嘗に西洋の文學のみならず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり、或は元祿文學に模倣するあり。我が文壇の泰斗として、新篇出づる毎に洛陽の紙價を貴からしめし、尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びてその新文體を創めしもの

なりき。

紅葉が艷麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が適勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。されど、その題材は稍單調なりき。良久しうして世間はその反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小説、冒險小説、俠客小説等の複雑なる脚色に喝采し、或は慘愴たる事件を敘したる所謂觀念小説、悲痛なる苦悶を抒べたる所謂心理小説を歓迎し、或は神怪不可思議なる妖怪談、或は淫靡不道德なる戀愛談と、幾度か流行は變遷しつゝ、その取材は日にくゝ人生の暗黒面

に向つて進み去らんとせり。その間、或は光明小説といひ、家庭小説と號する道德的傾向ある作物の行はれしものなきに非ずと雖も、皆膚淺陳套、未だ人心の要求をみたし、人生に理想を與ふるものにあらざりき。

この時に方りて、東洋の一小島國は日清・日露の大役を経て、俄然として一等國の伴に伍せり。戰勝に酔ひし豪奢の餘弊と避り難き財政上の壓迫とは、我が國民が生活難の聲として青年の耳朵に響きぬ。顧れば、嘗ては文藝形式をのみ評論したりし批評家は、

漸く人生の研究に轉進し來りて、或は高山樗牛が美的生活論となり、或は綱島梁川が見神説となり、或は自然主義といひ、無理想・無解決と呼び、在來の一切の教權を放下すべしとさへ説く者あるに至りぬ。既に生活難の聲に慄ける青年は、徒に多岐に惑ひて、唯煩悶するあるのみ。而して、所謂自然派の小説は、益々人生の暗黒面を誇張して、好みてかの悶々して燥焦し、狂奔し、疲憊困頓、蹌々跟々たる敗殘の青年を描きつゝ、以て人生の實相を盡したりとなせり。煩悶せる者が、暫くこゝに同情者を得たるが如く感ぜしは、

蓋し一時の迷想のみ。今や世間は漸く混沌たる思想界を出でて、更に高く、更に深き人生の眞意義を捉へんとして、倫理に、哲學に、宗教に、文藝に、秩序ある討究を重ねんとせり。思ふに、我が小説界が、崇高偉大なる理想に逢著して、更に向上の一路を發見すべきは、甚だ久しからざらんとするなり。上來、主として小説の變遷を敘したり、最近の文壇に於て最も注目すべきはこの種の文藝なればなり。さもあれ、上古以來、常に流行し來りし抒情敘景の小詩形も、亦甚だ衰へたるには非ず。

歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には蒼虬梅室の門派のみ獨り盛にして、和歌俳句といへば、専ら活社會と交渉なき閑人・隱者の間に行はれしもの、明治初年の大勢なりき。かの國粹保存論、國文學の研究等盛なりし時に至りて、落合直文等とその門下生との手によりて、歌道はまづ、青年社會に入り來りぬ。かくて偏に風雅を生命とせる月花の天地を小なりとして、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。俳道には正岡子規出づるあり、天保の俗調を排して、清新なる天明調を復活せしめ、更に進みて淡々たる

寫實の妙趣を鼓吹し、唯俳句のみならず、寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。この派より出て、筆を小説に著けたるものに、夏目漱石等あり。

この他、明治の新文藝としては別に新體詩あり。當初は故外山博士等が新體詩抄の調なりしが、その詞藻の稍、乾燥なるに飽かざる者は、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へんとするあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとするあり。中頃島崎藤村が溫雅優美の調、土井晚翠が縱橫跌宕の風、最も青年の間に喜ばれたり。今や、新詩の格調日に新なりと雖

も、或は險怪、或は蕪雜、未だ雄渾偉大にして、眞に國民の詩歌と稱するに足るものあらざるに似たり。更に、純文藝の範圍を出でて、専ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文直譯風の文章が流行したりし日に於ても、既に福澤雪池、福池櫻痴、成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては、三宅雪嶺、坪内逍遙、森鷗外、高山樗牛、大町桂月等あり。その文各特色あり、長短ありと雖も、皆縱橫自在にして、言はんとする所盡さるはなし。現代の所謂普通文は、純文藝の著作よりも、寧ろ此等の人々の筆致に

負ふ所多きに似たり。

六 花の雲

花の雲錦を上野の浅草、松尾芭蕉
五月の霞あつち早し最上川
杉枝に鳥のさうりや秋の暮
兼海や佐渡のさうりよ天の川
夏の花や蚊を疵うて五右衛門
黄菊白菊その外の名はなまじし 脂部嵐雪

元禄二年五月。

卯の花の絶間とて暗の門 向井玄来
春の海路のさうりや那 典謝蕪村
富士一つ埋み跡も若菜の
易水にわづらひるさうりよ我
桃の花のさうりよ長し 加藤曉基
五月雨や成程のさうりよ 大島蓑太

七 平泉

松尾芭蕉

十二日、平泉と心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞

すべろぎの
御代榮えん
とあづまな
るみちのく
山に黄金花
咲く。

き傳へて、人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道、そこも
わかず、終に道ふみたがへて石巻といふ港に出づ。
黄金花咲く。」とよみて奉りたる金華山海上に見わた



松尾芭蕉

な。」と宿からんとすれど、更に宿かす人もなし。やう
やり貧しき小家に一夜をあかして、明くれば又知ら

し、數百の廻船入江に
つどひ、人家地を争ひ
て、竈の煙立ちつゞき
たり。「思ひがけずか
かる處にも來れるか

藤原清衡。
基衡。秀衡、

秀衡の築き
て平泉の鎮
護となせる
山。

ぬ道迷ひゆく。袖の渡尾駿の牧真野の萱原などよ
そめに見て、遙かなる隄を行く。心細き長沼にそら
て戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。その間
二十餘里ほどと覺ゆ。

ぬ道迷ひゆく

そら

松尾芭蕉筆蹟

三代の
榮耀一
炊の夢

にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が墟は
田野になりて金鷄山のみ形を遺す。まづ高館にの
ぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和

國破山河在、
城春草木深。

泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔て、南部口をさしかため、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時のくさむらとなる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり。と、笠うち敷きて時の移るまで涙を落しぬ。

夏草や、つはものどもが夢の跡。

曾 良

卯の花に兼房見ゆる白髪かな。かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を遣し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。

義經の郎黨
増尾七郎、年
六十餘、白髪
を被り奮闘
して死す。

七寶散りうせて、珠の扉、風に破れ、黄金の柱、霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新にかこひ、蓑を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千歳の記念となれり。さみだれの降りのこしてや光堂。(奥の細道)

八 百蟲譜

横井 也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものゝかぎりなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものには託しけめ。

花に鳴く鶯
水に住む蛙
の聲を聞け
ば生さとし
生けるもの
いづれか歌
をよまざり
ける。

やがて死ぬ
けしきは見
えず、蟬の
聲。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれ
たるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆ
るはよし。古池にとんで翁の目覺したれば、このも
のゝこと更にも誇りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。や
や日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。
されば、初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、このも
のばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手柄なれ。
「やがて死ぬけしきは見えぬ」と、このものゝ上は翁の
一句に盡きたりといふべし。

螢は類ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水
に飛びかひ草にすたく。五月の闇は、唯このものゝ
爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕へら

鼓子火

ともけの火

あつち

讀筆有也井横

れて油
火の代
りにせ

られたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。歌
に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧
にはその真似すべからず。
茅蝸は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過

*淳于棼醉夢入大槐安國。見王。王曰吾南柯郡。屈卿爲守。凡二十載。使者送出穴。遂寤。尋古槐下蟻穴。乃槐安國。又一穴直上南枝。卽南柯郡也。

ぎて夕べは草に露おく頃ならん。つくくぼふしといふ蟬はつくしこひしともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。と世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣かへろふははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の謗となれり。同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。蟻は明暮に忙しく世の營に隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安*の都を

*欲以螳螂之斧禦隆車之隧。

逃れてその身の安きことを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて千丈の隄を崩すべからず。螳螂*のやせたるも斧をもたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひあるべし。蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人に似たり。促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲、その木にもよらで、いかでかく名をつきたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも、同じ名ありて、松をからし、人にうとまる。一在所に二人の八兵衛あり

て、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松
蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃端居珍しき
夕べ始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力
なく残りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家
のさま、蚊やりたく里の煙など、且は風雅の道具とも
なれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の
夜話にはいかに團扇のひまなかりけん。
(鶉衣)

* 嵇康 阮籍 山濤 向秀 劉伶 阮咸 王戎

九 知足菴の記

村田 春海

* 鶉巢樹、
不_レ過_二一枝_一、
偃鼠飲_レ河、
不_レ過_二滿腹_一。

あはれ世のならはしこそはかなき物はあなれ。高
き、賤しき、品いと異なりといへども、己がじし心行く
ばかりなるは稀にて、唯足らはぬ事のみぞ多かりけ
る。花を思ふとては梢の嵐を恨み、月をめづるとて
は尾上の雲をいとふためし誰かは逃るべき。* 林に
宿るさゝぎは、僅かなる小枝の影をのみたのみ、流れ
に水求むる鼠は、唯腹ふくるゝに過ぎず。とこそ古人
もいひつれ。かゝることわりをだに分たば、限ある
此の世に、限なき事を思ふべきかは。こゝに中村の
ぬしなん能く塵の世のけがしきを逃れて、萱が軒、松

の樞に心の月をすましめ、花を摘む夕、闕伽をくむ曉、御佛につかふる暇ある時は、氷をくだき雪を煮て、梅尾の昔を忍ぶめる業にしも心をなん慰めける。これやこの世に求むべきすぢをも忘れ、又人を羨むべきふしをも思はで、己が心から事足る業にしもあれば、彼のいにしへ人のいひけんことわりにこそかはめ。いてや空蟬の世の限なき求ある際とは、日を竝べてあげつらふべくもあらざりけり。うべなうべな、此の住家をしも足ること知るとは名づけしこと。
(琴後集)

一〇 西行法師

上田 秋成

*源頼朝。

文治それの年八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる人々、御前おひ、御あとべつかうまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず、遅からず、つらを亂さず、ねり出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、かしこみたいまつれる人数多あるに、お前拂ひして、あなとだにいはせず、世にいかめしく貴き御有様なり。かへりまをしして、御手輿に召させ給ふほど、御階の

西伯將^{*}獵、
卜^{*}之曰、非
龍非^{*}龍、
非^{*}熊、非
熊、所獲霸
王之輔。果
遇^{*}呂尙於
渭水之陽。

忌垣のもとに畏りをる法師のあなるが、見上げ奉る
面つき、なほ人ならずと思しけん、御輿ぞひの若侍し
て問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたる様して、雲水
にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す。とい
ふ。聞召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊のた
けき獲物の類ならで、賢き人得たるためしに、誘ひか
へらん。わがあとに連れて來れ。とて召連れさせ給
へり。

き所の一閒なる簀子に召されたり。大將殿見おこ
せ給ひて、昔藐姑射の山の御宮仕せし人の世をはか
なきものに思ひなして、身は黒くやつれたれど、月花
のなげきの譽は、物の心をなき東人さへ聞知りたるぞ。
弓取る人の、もとの心の猛きには、よむ歌も直くあか
らさまと聞くはまことか。武士のあらくしき心
には詠みうつし得まじきものに、宮人達は沙汰し給
へりとや。軍に出立ちて、笛鼓の音馬のいな、きは
物とも思はぬを、この三十字あまりのまなびには
心の後るゝはいかに。こはかしこき御心にも思し

漢高祖。大風起兮雲飛揚。
魏曹操。月明星稀烏鵲南飛。

惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢とらして、軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛くすくよかに、調もいと高しとこそうち聞き侍れ。いてや歌詠まんとては、益荒雄心をとり隠し、あてになよびかに詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君が御心のとくたけきまゝにうちいて給はんには、今の人誰かは立ち並び奉らん。三尺の劔を執りて、大風起り、雲飛揚す。とらたひ、槊こをよこたへて、烏鵲南に」と詠ぜし君達は、鞍の上にて、文に遊ばせ給ふならずや。」と云ふ。

人々、あれ聞き給へ。世は捨てたれどたのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓矢の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にてもをしへ承るべし。こは益、恐ある御問はせなり。つは者の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師にさへ物問はせ給ふことのかたじけなさよ。向ひ奉りては、をこがえうけましく家の傳なりなど、聞え奉るべうも覚えはべらず。ましてありがたき大宮仕をいなみ

衛の吳起。
齊の孫臏。

奉り親のいつくしみをさへあだなるものにして、年
纔かに二十五にて家を出てたるいたづら者の、弦ひ
き一つだに心に留めしことも侍らず。たゞ一言の
忘れがたきは、賞を重くし、罰を軽くせよ。といひしと
任ずる者を辱むれば危し。といひしとのありがたさ
よ。士卒の疽を病めるを吭ひしは、人の心をよく買
ひなすと雖も、誠の情よりとも覺え侍らず。竈を減
じて、人を危きに落とし入るゝは、將帥のさかしきにて、
國を治め、天の下をしるべき君の御心にあらず。軍
を出し給へる事の、怪しきまでかしこくませるを、餘

所ながら見聞き奉るには、このかたの御問許させ給
へ。とて、額を板敷に摺りつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、口とく心さとき法師なり。今宵
は月見る夜ぞ。物語今は果してん。人々と土器と
りはやし、曉かけて遊ばん。まれ人は酒飲まざるべ
し。しゝ猿の中に立ちまじりて、歌よめといふとも
よむまじ。たゞわが前に遊べ。風冷かなるにも、飽
かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は、暖かにも
こそ。この火取、法師に參らせよ。とて、白銀もてつく
りたる猫のかたちしたるを、取傳へて、君より賜ふと

て、前に置きたり。「しゝ猿は尙心たけし。鼠をだに
えとらぬ瘦法師が爲には、似つかはしき御賜物ぞ。」と
て、三度おしいたゞきぬ。

あした御暇たまはりて立ちいづるに、御館の人やど
りに、誰が殿のわらはひなはべならん、くゝり袴の裾、朝露に
濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、これ取らせん。
火埋みて手足煖めよ。」とて、かのきら／＼しき物を與
へて、かへり見もせず立ち去りぬ。童が主なる殿、い
とあやし。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童に
得させけん。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君うちゑみ

給ひ、かのえせ法師、あなづらはしくをさなげなる物
くれしとて、腹だたしくや思ひけん、わが門の前に捨
て行きつるよ。法師とて、男魂なくば修行もえせぬ
なるべし。されど家を出て、なほ才に誇りて、野山に
まじり、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨てらるべき
あさましさぞかし。一度けがれし物、その童に取ら
せよ。」とて、とりおろさせ給ひぬ。

西行、後にこのことを人に語りていふ、右府はまこと
にねじけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針の
おはするぞ。漢*高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、

*漢の高祖。

*心なき身に
もあはれは
知られけり
鳴立つ澤の
秋の夕暮。

天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふものを、生れながら得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やうく、衰へさせ給はん世の姿なるは、とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞き傳へては、秋の夕暮ならずもうちひそみぬべし。(藤篋冊子)

一一 江戸時代の文學

藤岡作太郎

江戸幕府の世は、泰平打續きて、殆ど兵戈の動くを見ず、文化の進歩前古に比なし。獨りこれに對比すべ

平安朝
中興文

き平安朝の文化も、貴族が占むるのみにして、庶民は與らざりしが、この時代はこれに異なり。學問・藝術上下に弘通して、四民ともにその徳を享け、文學の滋味も普く世に味はるゝに至れり。

されど幕府の施設漸く成るに従ひて、戰國の世に壞れかゝりし階級の制も更に立ち、従うて文學にも貴賤の別なきを得ず。上流の人は詩歌を詠じ、下流は俳諧を遊び、彼は學問にわたるものを喜び、此は戲曲・小説の類を愛し、彼は古文を墨守して固陋に流れ、此は新作に傾倒して卑俗に陷る。學識あるものは新

興の文學を卑しき新興の文學に就くものはみづから低うして高尚なる趣味を解せず。かくて戯曲小説の如きは、戯作を以て目せられて、正當なる文學上の地位を得ること能はざりき。

この時代に著しき思想界の現象は、儒教が佛教に代りて勢力を得たることなり。佛教の上下を通じて普く行はれたることは變らずといへども、寺院には領地あり、檀那ありて、富有なるがまゝに、僧侶は漸く安逸に馴れて、布教を怠れり。この時、儒教は勃然として興り、力めて修身治國平天下の道を唱へしかば、

世人を導いて文化の域に進ましむるもの、今は佛にあらずして儒なり。されど從來養ひ得たる佛教の感化もまた侮るべからず。國學の新に起りて、わが國本來の道を明めんとしたることも、また注意すべし。

殊にこの時代の人心を支配したるは武士道なり。武士道は日本固有の廉潔尚武の精神に、人倫五常の別を明らかにする儒教の意と、生死を離れ、進んで惑はざる佛教の旨とを折衷し、之を古來の戦亂に鍛へて成りたるものにして、この時代に至りて最も光彩

*陸生時々前

說誦詩書

高帝罵之

曰酒公居

馬上得之

安事詩書

陸生曰居

馬上得之

寧可下以馬

上治之乎

を發揮し、武士はこれを以て造次にも怠るべからざる大道とす。その朴直を守りて浮華を斥け、感情を卑しみて義理を重んじ、婦人の勢力を無視するは、著しく平安朝に相違せる要點にして、また武事を偏重するより、時に殺伐に流るゝ弊なきにもあらざりき。今、江戸時代の文學を左に槩説せん。

一、漢學 徳川家康馬上*に天下を得たりと雖も、馬上に之を治むべからざるを知り、佚書を蒐集し、古書を刊行し、漢儒を重用し、以て文學復興の機運を開けり。將軍綱吉特に漢學を好み、儒者を禮せしかば、學者輩

出し、文華一時に煥發す。所謂元祿時代是なり。木下順庵は京の人、のち江戸に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に雨森芳洲、新井白石、室鳩巢等、著名の士多し。伊藤仁齋京に起り、朱學は孔孟の古意にあらずとして、別に古學を立て、その子東涯博覽にしてよく父の學を祖述す。荻生徂徠江戸にあり、また朱學を駁し、六經を重んじて古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙す。その門人のうち、太宰春臺は經義に通じ、服部南郭は詩文をよくせり。筑前の士貝原益軒も當時の碩學なり。その書を著すや、槩ね平易

にして實益あらんことを期し、普通文に記して丁寧深切なり。江戸の新井白石は將軍家宣及び家繼に仕へて政務に參與す。學博く、識高く、わが國の歴史・制度・語學等に關して有益の著多く、行文犀利にして透徹せざる所なし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。

後、文化・文政の頃に至りて、太田錦城等また折衷學を唱へ、黨を分ちて相爭ふ。奥州白河の城主松平定信之を患ひ、林家の私學を幕府の有として昌平校と稱し、林述齋をして之を統べ、柴野栗山等をして之を助

けしむ。また朱學を奉ぜざるものは官職に就くことを得ざらしめたり。之を異學の禁といふ。此の時にあたり、關西には頼山陽の如き文豪あり、天與の詩才を驅つて日本外史の大作を著し、盛に尊王愛國の主義を鼓吹したり。

二、國學　元祿時代に於て和漢の文學に大功ありしを水戸侯光圀とす。彰考館を開きて大日本史を撰す。その學の重んずる所、大義名分を正すにありき。光圀また古典の研究に志あり。下河邊長流に託して萬葉集を註釋せしむ。長流業を終へずして歿し、

釋契沖その業を繼ぐ。契沖國文を好み、造詣至りて深く、識見世に絶す。その著述少からず。享保の頃、京に荷田春滿あり。國史律令に通じ、古意を明らむるを以て己が任とす。いはゆる國學とて、古典を究めて國體のある所を學ぶは、この人に起れるなり。幕末勤王攘夷の説の沸騰せるは、水戸の學と國學との感化與りて力ありき。賀茂眞淵は遠江の人、京に出てて春滿に學び、學成りて後、江戸に來りて講説し、田安宗武に仕へて厚遇せらる。その學は春滿に繼いでわが國固有の道（同書）を明

らかにするにあり。謂へらく、昔、儒佛の教の傳はりしより古道はこれが爲に廢れぬ。故に古道を明らかにせむとせば外國の影響なくして、人意の自然に出でたる古書を學ばざるべからず。その古書は萬葉集最も善し」と。よりて、深くこの書を究む。識見甚だ高しと雖も、詩文の才は寧ろ學問に勝れり。門下に高材の士多くして、これより國學の勢、天下を席卷する至れり。

眞淵の門人多きが中に、伊勢の本居宣長、江戸の加藤千蔭、村田春海等、最も名あり。宣長の學は一に古道

を明らむるにあり。古道を知るには古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に従事し、三十五年を経て業成る。即ち古事記傳にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを見るべく、實に契沖の萬葉代匠記とあはせて江戸時代國文學界の二大作なり。宣長なほ多くの著述あり。門流甚だ盛なりしが、歿後の弟子、伴信友・平田篤胤最も著る。篤胤は出羽の人。その意宣長より一步を進めて、古道を以て一の宗教とし、之を弘布して儒佛の教を斥けんとするにあり。勤王攘夷の説はこれらの論によりて、益、刺戟せられ

たり。當時、京の文壇は寂寥たりしかども、香川景樹の歌道を一新したる功は特筆大書せざるべからず。景樹の一派を桂園流といひ、大いに世に行はれたり。三、俳句 俳句は元祿のころ伊賀の人松尾桃青、芭蕉翁(京)に出でて北村季吟に學び、後江戸に來りて正風を起し、また東西に周遊して吟腸を養ひ、その風を擴む。詠ずる所人事よりも自然に多く、幽玄清淡にして廣く雅俗にわたる。四方翕然として靡き、俳句これより遍く都鄙に行はる。門人に俊秀の士多し。その後風調漸く卑俗に流れしかば、天明の頃、これを

慨して革新を唱ふるもの東西に起れるが中に、京の谷口蕪村その最たり。蕪村好んで自然の景物を詠じ、漢詩の趣を傳へ、またよく歴史的事實を材料とす。桃青と相並んで斯道の二聖とすべし。横井也有は尾張侯の臣、殊に俳文をよくして、淡雅輕妙なり。四、戲曲 戲曲は謠曲等より出で、江戸時代に至りて大いに發達せり。元祿の頃、近松門左衛門あり、京に住み、のち大阪に移り、盛に戲曲を作る。寫す所、人情の祕奥を穿ち、才藻湧くが如く、行筆の自在なること行雲流水に似たり。ついで竹田出雲あり、文才は門

左衛門に及ばずと雖も、趣向の變化に富めることは卻つて勝り、今日世に行はるゝはその作に多し。五、小説 小説は最初京阪に榮えしかども、文化、文政の頃に至り、江戸に作者輩出せり。中にも曲亭馬琴は學問該博にして文藻絢爛なり。椿説弓張月里見八犬傳等その作の人口に膾炙するもの多く、一篇出づる毎に、世人争うてこれを求む。その趣、一に儒教によりて専ら勸善懲惡を旨とせり。

(新日本文學史教科書に據る)

一二 不 慍

幸田 露 伴

或人曰く、我漸くにして人に勝れば、我漸くにして人に異なるなり。我漸くにして人に異なれば、人漸くにして我を知る能はざらんとす。これ自然の數なり。我漸くにして人に異なれば、人漸くにして我を知る能はず。我終に人を超ゆれば、人終に我を知る能はずして已まん。これも亦自然の數なり。兒童の智は壯夫の情を解する能はず、壯夫の情は耆老の感を會する能はず。かるが故に人若し他に勝れる學を爲し、道を修し、他に異なる意を有し、見を懷き、他

に超えたる情を具し、徳を成すに至れば、凡人庸士の之を知る能はざるは論無し、俊秀英靈の器と雖も、其の及ばざること一籌なれば、其の知る能はざるもまた必ず一紙を存せん。千里の才は百里の地に屈することあり、高眼達識は世の希なる所なれば、我の人より高き時は、人焉ぞ能く我を知らん。我の人に知られざるに至るに及べるは、また自ら慶すべし。抑、何の慍ることかこれ有らんや。

老子曰く、我を知る者希なれば則ち我貴し。と。且や今日衆愚の嘖々として稱する所となるは、明日囂々

か
や
こ
さ
く
り
し
る

として誹る所となる始なり。知られて而して後知られざるに至るは、知られずして而して永く知られざるに若かず。其の利を知らるれば、刀必ず用ひられて而して其の刃毀たる。其の力を知らるれば、牛必ず用ひられて而して其の筋骨疲れ憊る。聖人は褐を被て玉を懐にし、其の外を凡愚に同じうして其の内を露さず、光を韜み徳を藏むるをつとむ。韓信は知られざるを愠つて、亡げて而して蕭何に知られぬ。こゝを以て蕭何に役せられ、蕭何に擒へられ、功成つて身戮せられたり。李斯や商鞅や源義経や梶

原景時や、皆是利刀、斧牛なり。知られて而して用ひられ、役せられ、刃毀たれ、筋萎えて、而して後道路に委てられたり。古より曰く、女は己を愛する者の爲に容づくり、士は己を知る者の爲に死す」と。其の知らるゝや死して悔無からんとする耶。噫、また陋なるかな。これ婢妾、臣僕の道なり、自ら重んずる道にあらず。

かるが故に賤人は或は自ら銜ふといへども、高士は卻つて自ら晦ます。啻に人知らずして愠らざるのみならず、實に人の我を知らんことを懼る。毀譽は

外より來り、名稱は他より至る。我を呼んで牛となし、馬となし、我を目して狂となし、愚となすも、我は自らにして我たり、又何ぞ憂へん。人おのく、自得を貴ぶのみ。自ら得るある、何の慍ることかこれ有らん。」と。

答へて曰く、「言また一理あり。然りと雖も不愠の義を解して孔夫子の意當に是の如くなるべしといふ時は、たゞ一步の差にして而も千里の違あり。我漸くにして人に勝れば、人漸くにして我を知る能はざるに至るは、論無し。周公孔子の盛徳を以てして猶

且人に知られず。其の知られざるは凡常の人の悉く知る能はざるあるを以てなり。物大なれば小器これを容るゝ能はず、人偉なれば凡夫これを知る能はず。これ自然の數なり。世間の情態實に是の如きあり。されども我を知る者希なるときは我貴し、我何ぞ人の我を知らざるを憂へん、我卻つて褐を被て玉を懷き、韜晦して自ら安くせんとするに至つては少しく過ぎたり。高きことは高しと雖も、必ずしも中正にあらず。老子の道は則ち然り、夫子の道は則ち然らず。夫子の道とする所は、人に知らるゝと

人に知られざるとによりて、或は欣び或は慍ること無しと雖も、己既に得る有れば、己の得る所以の者を人に及し、己既に善なれば、則ち善を人に及さんと欲し、忠恕仁愛温として春の如きものあり。老子が聡明高達の一味にしてや、冷淡なるに同じからず。老子は善く身を保ち己を全うするを以て道とし、夫子は誠を以て人に推し、徳を以て民を新にするを道とす。老子は聰明絶倫なり、夫子は仁厚徹底なり。畢に些少の異なき能はず。されば子路かつて孔夫子に問うて曰く、此に人あり、褐を被て玉を懐かば何

如し。夫子答へたまはく、國に道無ければ可なり。國道有れば則ち袞冕して玉を執らん。此の語に據りても、孔夫子の道と老子の道との差あるを知る可し。

かく云は、甚だ輕率なれども、老子の意にては何はあれ褐を被て玉を懐くを妙とし、夫子の意にては世亂れ國無道にして如何ともする能はざる時ならば是非もなし、苟も國にして道有らば、文衣盛飾して玉を執るべし、飽くまで褐を被て玉を懐くにも當らざることなりと爲し給へるにて、二者の間に差あるこ

とは争ふべからず。慈仁を説くと雖も、老子の道は終に是（形入）嗇、禮儀を重んずと雖も、孔子の道は終に是仁。夫子の道には吾が生命をも差出して惜まざる所あり、身を殺して仁を成すといひ、生を捨て、義を取るといふ如き皆是なり、老子には是のごときところ無し。夫子の道は天の命に率ひ、人の性を盡し、以て造化の功を贊せんとす、老子は天地不仁、萬物を以て芻狗と爲すとなす。老子は數に明らかに、孔子は情に敦し。人知らずして慍らずの意を解して、我を知る者希なるときは我貴し、聖人褐を被て玉を懐くの意

老子ト孔子ト
 老子ト孔子ト
 老子ト孔子ト

に近しとなす時は、蓋し夫子の眞意を失ひ、敦厚の情景を目して澹泊の境趣となすの誤に陥らざるばあらず。夫子の平生たゞ人の純粹敦厚ならんことを欲したまふ。人知らずして慍らざる、これ何等敦厚の景致ぞや。かるが故にまた君子ならずやと稱したまへるなり。寒冷澹泊、獨善自喜の老子一輩の境趣とは、自ら相異なるものあるを知らざる可からずと。（悦樂）

一三 不二の神山その一

遲塚麗水

函嶺より望めば、不二の神山は晴巒雨峯を壓して、高く雲漢を抜く。上峯は五朶を成せり。上、青天と連なり、下、白雲と接す。車の行くに隨ひて、四朶となり、三朶となり、既にしてまた四朶となる。雪は日を得て雲母の色をなし、陰は紫嵐を凝らせり。御殿場に到りて客舎に就く。日、亭午にちかし。主人曰く、登嶽の客は皆平旦にこの處を發す。貴客は京人なれば、攀躋の具に乏しからん。合力を備ひ給へ」と。合力とは綿衣草鞋、食糧を負うて東道をなすものなり。余應ぜず。直ちに飯を命ず。飯終る。馬を喚ぶ。

馬來る。まづ草鞋數隻を買ひ來らしめ、これを腰間に帶びて、騎して發す。仰ぎ見れば、嶽影忽ち亡く、風色甚だ悪し。馬夫、面を仰いで曰く、雨將に來らんとす。然れども山は應に牢晴なるべし」と。雲の徂徠すること頻りなり。中に隱々として嶽影のさながら斷霞のごとく紅なるを見る。一路、燕麥香し。馬鈴の音を趁うて胡蝶亂れ飛び、夢の神をそのやさしき翅に載せて我が懷に送る。既にして大いに嘶く聲あり。夢覺むれば、急阪馬頭より起る。馬夫曰く、回馬阪なり」と。馬を舍つ。賣茶

の翁に乞うて茶を喫し、憩ふこと少時。これより路は透迤として矮樹長草の間を通ず。路窮りて、一字あり。金剛杖を賣る。これを購ふ。長さ五尺にして、六稜角をなす。

既に登れば、草や樹や漸く短く、漸く少し。初めには人を没し、次には帽に及び、次には肩に至り、而して袖而して行滕歩に従ひて漸次に短小となる。遙かに望めば草色煙のごとく、迢々として雲に入る。近づけば、卻つて無し。唯蓬の花の處々に散點せるを見るのみ。遂に一合目に至る。路は爛沙の上を走る。

顧みれば近山遙水、歴々見るべし。身は既に人間を抜くこと幾百尺の上にある。鞋を没する沙は淨うして纖埃なし。踏みて行けば、珊々として聲あり。已に二合目に至り、更に三合目に至る。石室あり。茶を賣り、菓子を賣り、又卵と草鞋とを賣る。凡そ一合毎に石室あり。皆山骨の露出する處を相し、之を背にして屋を作り、圍むに累石を以てし、僅かに一面を闕きて出入する處とす。遠く望めば隆然として凸起せり。室に入れば方三四弓、直ちに地上に板を列ね、上に席を布くのみ。頗る幽陰なり。

*雲觸石而出、膚寸而合。

已にして四合目に至れば、足柄・愛鷹及び甲州の諸山はみな余が鞋底にあり。大地の蒼々然たる處に兩碧の甚だ明らかなるを見る。南なるは富士の沼にして、東なるは甲州山中の湖なり。小なること盆池のごとし。膚寸の雲の帯び來れる雨を受くとも、水は當に四坡に横溢すべきかと疑はる。皆を決すれば、東海の濱、一帶百里、水は南溟の雲に入る。その間を斷ちて、一道の霓よりも澹きものありて走る。これ紫瀾の岸を打つて回る影なり。時は暮に近し。雲あり、相逐うて上峯より落ち來り、皆下界に堆屯し

て流れず。風の吹き披くあれば、青絲を穿ちたる銀針ありてこれを縫ふ。その青絲に似たるものはこれ田子の浦に浮べる三保の松原か。何ぞそれ纖々として縷の如き。その銀針に似たるものはこれ富士川か。三十六瀬、何ぞそれ一芥を浮ぶるに勝へざる。既にして、山影皆消ゆ。雲既に人寰を鎖せり。嶽上の奇は將にこれより始らんとす。

一四 不二の神山その二 遲塚麗水

忽ち脚下に波濤の如き聲を作すあり。一望平布の

搏^{*}扶搖、羊角而上者九萬里。

雲は争ひ立ちて羊角^{*}して嶽に登る。これ風雨の人間に満つるなり。雲、急に余を追ふ。余乃ち遙方の石室を望みて走る。雨は逆上して、濺ぐこと亂雹の如し。草帽飛ばんとすること數次。身は雲と相先後す。漠々たるもの既に行膝を没せり。超乗して走りて、纔かに石室に到れば、雲は既に咫尺にあり。余を石室のうちに窮追して、更に上峯に向つて走る。走る處石沙皆活く。石室の人晒つて迎へて曰く、これ過雨なり。頃刻にして霽れなんと。言未だ終らざるに黒風、白雨、室に満つ。膝を抱きて俟つこと少

時にして、石室の戸に微紅あり。走り出でて、さきに余を追ひし雲を望めば、既に上頭の寶永山に觸れて碎け、更に夕暉に照されて、雨は千顆、萬顆の珠璣となり、紛々として中天より落つ。手を舉げてこれを受ければ、光彩一瞬にして消え、たゞ新に亂暈の痕を衣上に添ふるのみ。顧みて人寰を見れば、正に是黄昏なり。夕暉^{タキ}の前に雲あり。奇峯を成して争ひ起つ。みな日を銜^ヒめるがために紅く輝き、周圍に金精の色を放てり。既にして、朱丸の如き夕暉急下すれば、奇峯忽ち没し、天地寥廓、皎然たる大月東天に浮ぶ。

*天帝之座也。

仰いで上峯を望めば、雲あり。俯して下界を瞰れば、雲あり。上下の雲間に、唯鐵よりも黒き一大絶壁の斜に懸垂するあるのみ。四顧すれば、縹緲蒼茫、身は天柱を攀ぢて紫微に入る想あり。この高遠の景に對しては口言ふ能はず、筆描く能はず。神澄み、氣清く、愴然として涙の隕つるを知らず。爛沙の上を度れる一路の微白なるを踏み、磬折して登り、終に行きて六合目の石室を得たり。石室の主人爐に擁して坐す。驚き立ちて迎へて曰く、暮夜獨往すること貴客のごときは稀なり。と。余、寒きこと

甚だしきを以て、直ちに主人の座を奪うて坐し、且飯を命ず。粗糲にして食ふべからず。枯魚一枚、豆腐汁一椀、また箸を下すに堪へず。この地、海を抜くと七千尺。氣壓の微弱なるが爲に、飯を炊げども之を熟せしむること能はず。糲を加へて纔かに粘力を添ふといふ。饑ゑんことを恐れて、勉強して數椀を傾け、終に衾を擁して臥す。枕邊に鏘然たるものあり。琴筑を鳴らすがごとし。これ屋下の雪の解けて、筧を傳ふ聲なり。久しうして眠り得ず。首を上ぐれば、小燈焰なく、石室の中、凄陰幽寂、屋外たゞ風

聲を聞くのみ。

未だ曉ならざるに、短夢回り來れば、主人は既に爐に踞し、飯を炊ぐ。余既に萬古の雪に漱ぎて心下に一塵なし。靜坐して日出を待つ。既にして、主人麾きて曰く、日將に出でんとす。と。起ちて扉邊の平石に踞してこれを看る。初め東方昏黒の裏、紫氣ありて搖曳し、漸く變じて微紅となる。余、眸を凝らす。俄かにして、炬の如きものあり、渥丹のごとし。或は昇り、或は降る。會、彷彿として上峯に天鷄の聲を聞く。石室の人曰く、これ淺間神社の鐸聲なり。と。余、屏息

して立ち、石室の人跪きて拜す。須臾にして、渾沌のところ依稀として五彩の龍文をなし、次第に鮮明を加へて、光芒陸離、遂に混じて猩血の色をなす。中に物ありて浮べり。雙黃の卵子の如し。忽ち合して鎔銅の色をなす。石室の人曰く、是太陽なり。と。鎔銅の色は再び變じて爛銀の色をなし、環らすに紫金を以てし、終りに白熾鐵の色をなす。忽ち鐵椎の下に逢ふが如く、百千道の金箭天を射、猩血の色溟中に逆だち、太陽之を追うて躍如として昇る。天地茲に清明なり。

余この宇宙の大觀を看るを得て、胸宇の海の如く闊きを覺ゆ。石室の人と共に食し、連りに數椀を傾け結束して出づ。石室の人曰く、これより峻なること甚だし。徐々として脚を攢めて登れ。然らずんば、呼吸切迫して、上峯に達する能はざらん」と。謝して行く。仰ぎ見れば、崢嶸たる絶頂は四峯を成して高く天を衝き、無心の雲もまた畏れて近づき飛ばず。下瞰すれば絶壁斜に走りて直ちに人寰に至り、一物の遮るあるなし。爛沙漸く大に、處々に山骨を露す。その處、常に雪あり。鞋痕、碎銀の上に狼藉たり。掬

してこれを食はんとし、驚歩して淨處に就く。萬古の雪、冷かにして、脾肝に透徹す。路益急なり。盤折して登り、纔かに八合目の石室に至る。これより路愈峻なり。鞋底幾たびか摩敝して、終に襪に及ぶ。踞して鞋を易ふること兩三次。嶽神の棲處は既に近し。奇巖處々に立つ。その狀、巨魔の如し。既にして九合目に到り、遂に絶頂に達す。(日本名勝記)

一五 國體の精華

穂積 八束

我が日本の國體と國民道德との基礎は祖先教に淵

源す。祖先教とは祖先崇拜の大義を謂ふ。我が日本民族の固有の體制は血統團體たり。血統團體とは、民族が其の同始祖を敬愛するに由りて共存團體を成し、祖先の威力に服従するに由りて平和の秩序を維持するを謂ふ。小にしては家を成し、大にしては國を成すものなり。

祖先崇拜の大義は血統團體を構成し、維持する原由たると同時に、血統團體の存續は亦祖先崇拜の大義を鞏固にし、深遠にする成果あり。二者相待ちて消長し、須臾も離るべからず。而して、我が固有の國民

道德たる忠孝友和信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に溯源し、血統團體を保維する軌轍たり。我が堅固なる國家の體制は祖先教の基礎の上に立つ。これを千古に維ぎ萬世に傳ふるは、我が民族の特質にして、我が國體の精華たる所なり。

人は獨立孤存し得べき者にあらず、共同團結して、以て其の生存を全うす。而して其の團結する原由と形體とは固より一ならず。但し利害を以て集散し、約束を以て協和を維持する者は、其の團結固からず、又久しからず。利害の異同は情況に隨ひて時に變

轉し、人爲の約束はまた人爲を以て解除せらるゝを免れざればなり。血族相依るは自然の團結なり。兒孫が父母の保護の下に團圓するは社會の始にして、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團結たり。血脈相通ずるは天然の連鎖なり、人爲を以つてこれを絶つことを得ず。利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情に由りて離るべからざる共同生存を成す者は血統團體なり。血統は之を祖先に受け、之を子孫に傳ふ。故に其の團結は永久なり。血族關係は利害を以て離合斷續

するを得ず。故に其の團結は鞏固なり。而して之を統一する者は祖先の威力なり。故に子孫がその祖先に對するや、敬愛の情厚く、忠順の念深し。家に在りては、家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して家長權を行ひ、國にありては、天皇は天祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とは共に君父が其の祖先の慈愛する子孫を祖先の威靈に代りて保護する權力なり。吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、維持し、遺傳したる餘惠なり。何が故に血統相近き

者が相依りて家を成し、氏族を成し、又國を成したるか。祖先を崇拜し、其の威力と慈愛との下に生存の保護を全うせんと欲する天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、其の慈愛なる保護の權力に従順なる至情は、延いて之を其の父母の父母に及ぼすべし。吾人の祖先の祖先は即ち畏くも我が天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國民の宗家たり。父母拜すべし、況や一家の祖先をや。一家の祖先拜すべし、況や一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は

現世に在る祖先たり、天皇は現世にある天祖たり、父母に孝なるべき所由は、即ち皇室に忠なるべき所由にして、之を一貫する國教は祖先の崇拜なり。此の大義は吾人の祖先が國家を成したる基礎にして、吾人が之を永遠に維持する軌道たるものなり。人は信仰に因りて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の現象を總合して之を其の根柢の眞理に歸結し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は、肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫を慈愛する父母の威靈は、顯界に

於て其の肉體を喪ふとも、尙幽界カクハに在りて其の子孫を保護することを確信したり。是、祖先崇拜の大義の淵源にして、敬神の我が國教たる所由なり。我が固有の國體、民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。家は祖先の威靈の住む所、國は天祖の威靈の住む所にして、祖先の威靈は家國を防護す。吾人は祖先の生命の繼續にして、子孫は吾人の生命の延長たり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは、吾人の肉體に於て代表せらるゝ祖先の生存を永遠に傳へんと欲するなり。祖先コノミと吾人ウチと子孫コノミとが、家國ウチの觀念カクハに

於て同化し、其の繁榮にして永久なる存在を全うする大義此に存す。カクハ祖先の靈位を現世に代表する君父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先が其の子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の共愛、悉く皆我が同祖の祭祀を重んじ、之を永遠に傳へ、祖先の家國の鞏固にして永久なることを欲する祖先の遺志に適從する道ならざるはなし。我が祖先崇拜の大義は國民の確信に出で、不朽の國體は是に由りて其の基礎を立て、國民の道德は是に由りて深厚なり。斯の國斯の民を、

千古に溯り萬世に亙りて保持する者は、此の國體の精華たる我が固有の祖先教の力なり。(愛國心)

一六 日本畫

藤岡作太郎

日本畫と西洋畫とは漸次混融してその區劃も明瞭ならざるに至るが如しと雖も、此の兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は尙甚だ顯著なり。啻に絹紙と彩具との相違のみならんや、その用意筆法等に於て皆然り。彼にありては、藝術は科學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近明暗力めて自然

に背かざらんことを期し、此にありては、文化の精神的方面獨りまづ進み、筆を揮ふもの感興に乗じて腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも漏すことなく、此は主體の外は生地の儘に存す。一は濃豔、一は瀟洒、一は輪奐たる樓臺に顯官の客を引くが如く、一は幽閑なる茅屋に高士の梅を愛するに似たり。是等の差別は、蓋しその初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今はた西洋交通の歴史によりてこれを合一せん

とする傾向あるなり。

我が國の文藝に於ける佛教の感化の甚深なること
多言を要せず、眞の美術史は聖德太子の佛教興隆に
始り、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。
されど此の時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を
博すべけれ、繪畫の步調は未だこれに伴はず。平安
朝に巨勢金岡が出てし頃より漸く丹青全盛の世は
來れるなり。而して奈良朝の彫塑がなべて佛像な
るが如く、平安朝の繪畫も槩して佛畫の外に出でず。
按ふに平安朝の如く形式美を偏重したる時代は他

御堂關白藤
原道長の創
建。
白河天皇の
創建。

に類例を見ず、佛教も亦形相の具足によりて内心の
信仰に近づくべしとせり。法成寺（法勝寺の如き今
廢墟をだに存せざれども、金堂講堂七寶莊嚴天を摩
する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡し、情
態は歴史の傳ふる所、今に存する鳳凰堂を見てもそ
の一端を窺ふべし。香煙徐ろに薰じて幢幡を掠め、
蓮華頻りに散つて轉讀（やんぱん）にたぐふ。龍頭の舟は池上
に浮んで笙鼓月に冴え、囀伽の袖は庭前に翻りて舞
容風に堪へず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫
雲の來迎を待たずして身は既に汚濁世界を離る。

斯の如き場に用ふる畫像なれば、彩華炫耀丹碧映射、その色は珊瑚水晶を碎き、その線は黄金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、飽くまで濃く飽くまで鮮かに、精を窮め微を闡きて、後世の乾枯洒脫なるものとは全くその選を異にしたるなり。平治鎌倉時代の繪卷物も亦日本繪畫の精華なり。平治物語繪卷等は源平鬪争の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛教勃興の機運を示す。何れも時代の反映にしてまた不朽の逸品たるを失はざれども、内容外形共に根本の變化を受けたるは實に東山時代の繪

*法然上人。

畫にして、僧雪舟等その代表者たり。此の革新は禪宗の提擲によりて成り、鎌倉時代にこの宗の傳來せしより漸く養ひ來れる勢力の、こゝに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。抑、平安朝の佛寺を去つて禪刹の門をくゞるや、彼此別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば物の美醜も眼を遮らず、一旦その道に悟入すれば經典佛像何の要かあらん、教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里

の情趣を偲ばしむるが如し。 繪畫もこれに同じく、色を棄て、筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を産み、秃筆數行にして樹石を刻む。 一見すれば兒戲、熟視すれば神工、いよいよ味うていよく、趣あり、恍惚として吾我を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

桃山時代は、豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫も稍移りて雄大穠麗の風を喜べども、未だ東山の根據を衝くに及ばざりき。 江戸時代に至りて、幕府が消極の方針は

更にその規模を縮めし枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野住吉も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり、菱川師宣以來の浮世繪が時勢粧を寫して山水花鳥以外に題目を求めたるは最も注意すべしと雖も、鄙俗に流れて遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。 大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比するに、全然別種のものに屬すれども、匠氣を忌み形似を疏にし、氣韻生動を以て第一義とするは則ち相似たり。 應舉等の寫生畫は自然の摸寫に力めて別に一流を立

てたるものなれども、また清淡洒脱の習を脱するを得ず。訥言が創めたる土佐古風、容齋が好める歴史畫の如きは、即ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、また時勢の反響なり。但し此は彼の如き價值なきを憾とするのみ。一派また一派、各盛衰の數を免れざりしが、未だその間に崛起して斯道の根本的革新に成功せるものなく、かゝる中に明治の昭代は來れり。（東圃遺稿）

一七 月雪花

赫々たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照す。月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。日は仰いて見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、羣陰皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせて了ふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、高潔無垢、崇美と稱ふべき、やさしい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい、この光に對しては誰しも人生

*荷田蒼生子
の詠。

の慰藉を感ずる。詩的情緒が油然とんねんとして涌く。晝の閒は猛獸と鬪つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帯リウイの椰子の陰、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隅なく世界を照す月光の、人の胸懷にしみ渡ることは、恰もその影カゲの千草の露の玉毎に宿るやうなものである。うちむウチムかふ月は一つのかげながら、うかぶはちぢの思なりけり。である。東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。之を嘆嗟し、之を

*花ならば咲かぬ梢もまじりなん、なべて雪ふるみ吉野の山。

吟咏した詩歌の感吟は、世界各國の言語に充ち満ちて居る。天文學者は云ふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。と。この冷たい光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。雪は月よりも、一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや、花ならば咲かぬ梢もまじりなん。なべて雪降るみ吉野の。といふやうに、眼に入るもの、悉くその

下に包まれてしまふ。三千世界銀成色。十二樓臺玉作層の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川を残して、山といはず、野といはず、また、く中に瓊玉を敷く壯嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しもかはらぬ。花紅葉色々の眺めはもとより美しいに相違ない、花の

手を、し
 髪中、し
 花切

散つたのちの新緑の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙變化の奇造化の功を盡したるものではあるまいか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程樂しいものではないであらう。雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲きみだれるの

は、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへもつて居る。菜や大根の如く食用の爲に作つた野菜類の花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價の生じたのは無理は無いが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じ様に、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、いかばかり寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、牀の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも

*年ふれば齡は老いぬ、しかはあれど花をし見れば物思もなし。

花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪のながめはその高潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその豔麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ花やか花々しい華美華麗華奢等の語は皆花に基づいた語である。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余は唯、花をし見れば物思もなし。といふ古歌を以て、總べてを總括し得べしと信ずる。

月雪花三つのながめは各その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことが出来ぬ。

康資王母の詠。

清原深養父の詠。

謠曲葛城の句。

山櫻、花の下風吹きよなり、木のとごとく雪のむらぎえ、
 これは花を雪にたとへたのである。
 冬ふがら空より花のちりくるは、雲のほなさは春にやあるらん。
 これは雪を花にたとへたのである。
 笠は重し、吳山の雪靴はかんばし、楚地の花、華肩上
 の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花
 目を手折る。これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞

して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪をめで
 ぬ人も無い。思へば、世界の一部には全く花を知ら
 ぬ國もある。一年中冰雪に鎖されてゐるアイスラ
 ンドでは氷は即ち人の家である。この地の人は寸
 紅の目を樂しませるものもたない。又之に反し
 て、全く冰雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて
 生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たこと
 がない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して夜深
 を知らぬ繁華を倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい
 月の光を見ることが出来ない。我等日本人が昔も

今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。
月雪花のながめは古人の歴史が加つて一層の感興が増す。

伊藤仁齋の詠。

世々を経てながめし人の數よまよ
我をとゆるせ、秋の夜乃月。

月は古來の歴史を照す鏡である。

唐詩。

年々歳々花相似、歳々年々人不同。

唐詩。

鬢の霜頭の雪。人生の感は花を見てますます繁く、雪を見ていよく多いのである。

二千五百有餘年來、月雪花三つのながめを有し得たる、われ等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を傳へたるよ、如何に多くの追慕をわれ等に催さしむるよ。

(月雪花)

一八 比良の山風

五十首歌奉りし中に

湖上の花城 宮内卿

花をよみし比良の山風吹きたにわれ
こゝろ行く船のあはれゆるまで

五十首歌よりし時寂蓮法師

暮れてゆく春のみたをた知れども

寂におつる宇治の紫舟

題 知れども 藤原家隆朝臣

つらにきん糸ぬ夜あつたの社鶯

結しほどとねむるむ村の空

題 結しほどとねむるむ村の空 西行法師

心なき子もあはせは知れぬ

鳴るる澤の秋のゆづり

本中そ歌よりし時 攝政大臣良房

雲はみれをよほせとも 秋風哉

杉ののこりて月をよほせ

る首歌奉りし時 藤原定家朝臣

駒とめて袖にうつろふよもみ

さのわりの雲の夕暮

定家朝臣が母身まゝりし後秋の

ころ墓所近き堂にとりめてよ

みつりてよ 皇太后宮大夫俊成

まねびがたし。あるは深き山へ逃げ籠り、遠き世界
に落下り、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかゞあ
らんと、君も御心亂れておぼし惑ふ。豫ては猛く見
えし人々も、實（クハト）の際になりぬれば、いと心あわたゞし
く、色を失ひたるさまども頼もしげなし。
六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて遂に
身方の軍敗れぬ。荒磯に、高潮などのさしくるやう
にて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあ
きれて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。
あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍

(新古今和歌集)

一九 新島守

いつの年よりも五月雨はれまなく、富士川・天龍など
えもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡し難
ければ、攻めのぼる武者ども、あやしく艱（イハ）めり。か
かれども、遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の武者も
出立つ、其の勢六萬餘騎とかや。宇治・瀬田へ分ち遣
はす。世の中ひゞきの、しるさま、言の葉も及ばず、

*承久三年。

まねびがたし。あるは深き山へ逃げ籠り、遠き世界
に落下り、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかゞあ
らんと、君も御心亂れておぼし惑ふ。豫ては猛く見
えし人々も、實（クハト）の際になりぬれば、いと心あわたゞし
く、色を失ひたるさまども頼もしげなし。
六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて遂に
身方の軍敗れぬ。荒磯に、高潮などのさしくるやう
にて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあ
きれて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。
あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍

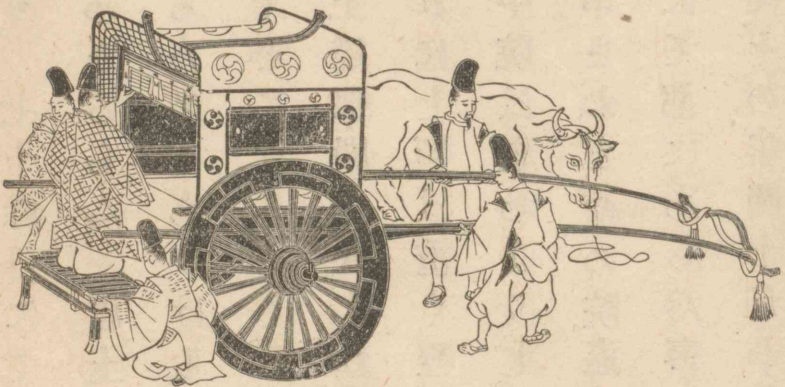
後鳥羽院。

源代
とりかへす
ものにもが
なや、世の
中をありし
ながらのわ
が身と思へ
ば。
右京權大夫
藤原信實。

計らひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷
し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々處々におぼし惑ふ
こと更なり。本院は隱岐の國におはしますべけれ
ば、まづ鳥羽殿へ綱代車のあやしげなるにて、七月六
日入らせたまふ。今日を限の御ありき、あさましう
あはれなり。ものにもがなや。とおぼさるゝもかひ
なし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一
つ二つや餘らせたまふらん。まだいとほしかるべ
き御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。
七條院へ奉らせたまはんとなり。かくて同じき十

順徳天皇。

仲恭天皇。



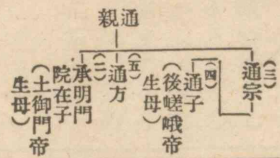
(考圖車輿)車代綱

三日に御船に奉りて、遙かな
る波路を凌ぎおはします御
心ち、この世の同じ御身とも
おぼされず。いみじう、いか
なりける世々の報にかとら
らめし。新院も佐渡の國に
遷らせたまふ。まことや七
月九日、帝をもおろし奉りき。
この卯月か、とよ、御讓位とて
めてたかりしに、夢のやうな

土御門上皇*

り。七十餘日にておりたまへるためしも、これや始
めなるらん。唐土にぞ四十五日とかや位におはす
るためしありけるとぞ、からのふみ讀みし人のいひ
し心ちする。それもかやうの亂やありけん。さて
上達部殿上人、それより下、はた残りなく、この事に觸
れにし類は、重く、軽く、罪に當る様いみじげなり。
中院は初めよりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め
申さねど、父の院遙かに遷らせたまひぬるに、のどか
にて都にあらん事いと恐あり。とおぼされて、御心も
て、その年閏十月十日、土佐國の幡多といふ處に渡ら

後嵯峨天皇。



せたまひぬ。去年の二月ばかりにや若宮いできた
まへり。承明門院の御兄人に、通宗宰相中將とて、若
くて失せたまひにし人のむすめの御腹なり。やが
てかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉りた
まひて近く侍ひける北面の下臈一人、召次などばか
りぞ御供つからまつりける。いとあやしき御手輿
にて下らせたまふ。道すがら雪かきくらし、風吹き
あれ、吹雪して、來しかた往くさきも見えず、いと堪へ
がたきに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かる
に、

うき世はあられとておそ生れけ^{たひあろつに}た。

ことより知らぬわがなみぞかふ。

せめて近き程に。と、東より奏したりければ、後には阿波の國に遷らせたまひにき。

後鳥羽院。

四つにて位に即きたまひて、十五年おはしましき。下りたまひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じ事なりしかば、すべて三十八年が程この國のあるじとして萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を従へたまへりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有様にて、遠きをあはれ

津の國のこ^{津の國のこ}やとも人のいふべきに、ひまこそなけれ、葦の八重ぶき。

み、近きを撫でたまふ御惠、雨の脚よりもしげければ、津の國のこ^{津の國のこ}やのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松もやうく、枝をつらねて千代に入千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を経ても、空ゆく月日のかぎり知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありく、てよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへたち別れおのがちりぐにさすらへ、磯の苦屋に軒を並べて、おのづからことどふものとは、浦に釣する海士小舟、鹽やく煙の靡く方をもわが故郷の

しるべかとばかり眺めすごさせ給ふ。御すまひどもはそれまでと月日を限りたらんだに、明日知らぬ世のうしろめたさにいと心細かるべし。まいて何時を果と廻り逢ふべき限だになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡したまふべき御様ども、くちをしといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山かげにかたそへて大きやかなるいはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。

*いづくにもすまれば
たすまで
あらん、柴
のいほりの
しばしなる
世に。

誠に柴の庵のたゞしばし。とかりそめに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、故づきてしなさせたまへり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるくと見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。潮風のいとちたく吹き來るを聞しめして、

われまそそ新島守よ、おきの海は

あらね波風こゝろして吹け。(増鏡)

二〇 日野の閑居

鴨 長明

*色々の雲のはたてをかざりにて入日や彌陀の光なるらん。

今、日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、中には西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置しまつりて、落日をうけて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢竝に不動の像をかけたなり。北の障子の上に、小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置けり。すなはち和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏・琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏・繼琵琶是なり。東にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の牀とす。東の垣に窗をあけて、こゝに文机を出せ

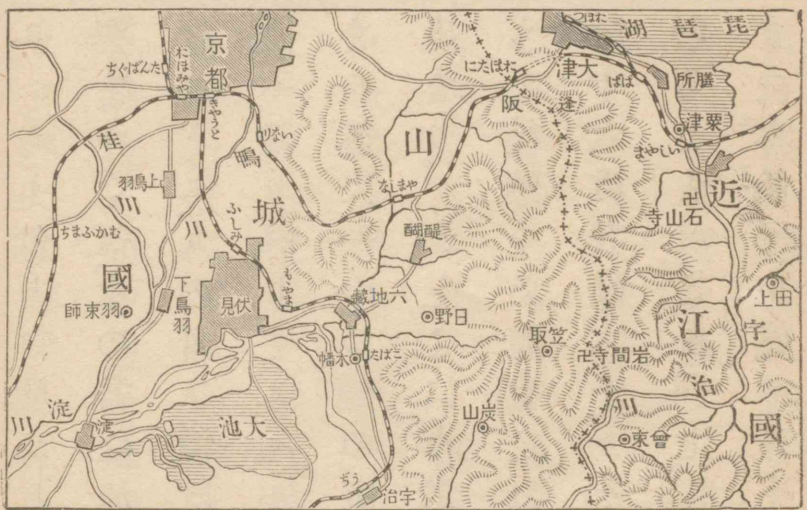
り。枕の方に爐あり。これを柴折りくぶる便とす。庵の北に小地をしめて、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはち諸の藥草を植ゑたり。假庵の有様かくのごとし。

その處の様をいはい、南に竈あり。岩を疊みて水を溜めたり。林、軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木の葛跡を埋めり。谷繁けれど西は晴れたり。觀念の便なきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。語らふごとに死出の山路を契る。

世の中を何にたとへん
 朝ぼらけ漕ぎゆく舟の
 あとの白波
 澤陽江頭夜
 送客、楓葉
 荻花秋瑟瑟
 桂大納言源
 經信、後、
 大宰權帥た
 り。琵琶の
 名手。三船
 の名譽を得
 たり。

秋は蜩の聲耳に満てり。空蟬の世を悲しぶかと聞ゆ。冬は雪を憐ぶ。積り消ゆるさま罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨り居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らん。もし跡の白波に身を寄する朝には、岡の屋に行きかふ船を眺めて、滿沙彌が風情を盗み、もし楓（ニカヅナ）の風葉を鳴らす夕べには、潯陽の江を思ひやりて源都督（ニカヅナ）の流を習

ふ。もし餘りの興あれば、しばぐ松の韻（ニカヅナ）に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲を操る。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめんとにもあらず。獨り調べ、獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る處なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。もし徒然なる時はこれを友として遊びありく。彼は十六歳、我は六十。その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或は茅花を抜き、岩梨を探る。また零餘子（ニカヅナ）を盛り、芹を摘む。或はすそわの田井に



日野附近圖

至りて、落穂を拾ひて、穂組を作る。もし日うらゝかなれば、嶺に攀上りて、遙かに故郷の空を望み、木幡山伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさほりなし。あゆみ煩ひなく、志遠くいたる時は、これより峯續き炭山を越え、笠取を過ぎて、

琵琶の名手、逢阪の關に隠栖す。攝津の歌人、後、近江國曾東山中に隠る。

山鳥のほろ
聲さけば父
かと思ふ、
母かと思ふ。

岩間に詣で、石山を拜む。もしはまた粟津の原を分けて、蟬丸翁があとをとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫が墓を尋ね、歸るさには折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉を求め、蕨を折り、木の實を拾ひて、且は佛に奉り、且は家苞にす。もし夜静かなれば、窗の月に古人を忍び、猿の聲に袖を濕す。叢の螢は遠く眞木島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろくと鳴くを聞きて、も父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。或は埋火をかきおこして、老の

山鳥のほろ
聲さけば父
かと思ふ、
母かと思ふ。

寐覺の友とす。恐しき山ならねど、梟の聲をあはれぶにつけても、山中の景氣折につけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず。(方丈記)

二一 羽衣

シテ 天女
ワキ 白龍
ツレキ 漁夫
風早の三保の浦わを漕ぐ舟の舟人騒ぐ波立つらしも。
千里好山雲乍斂、一樓明月雨初晴。

風早の三保の浦わをこぐ船の浦人さわぐ波路かな。
「是は三保の松原に白龍と申す漁夫にて候。」
萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨はじめ晴れたり。實に長閑なる時しもや、春のけしき、松

*風むかふ雲のうき波立つと見て釣せぬ先に歸る舟人。

原の浪立ちつゞく朝霞、月も残りのあまの原、及びなき身の詠めにも心そらなる氣色かな。忘れめや、山路を分けてきよみ瀉、はるかにみほの松原に立連れ、いざや通はん。風むかふ雲のうき波立つと見て、釣せて人や歸るらん。待てしばし、春ならば吹くものどけき朝風の松は常磐の聲ぞかし。波は音なき朝なぎに釣人おほき小舟かな。

「われ三保の松原にあがり、浦の景色をながむる處に、虚空に花降り、音楽聞え、靈香四方に薫ず。是、唯事と思はぬ處に、これなる松に、美しき衣懸れり。」

寄りて見れば、色香妙にして常の衣にあらず。如何様取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

「のう其の衣は此方にて候。何しに召され候ぞ。」
「是は拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候よ。」

「其は天人の羽衣とてたやすく人間に與ふべきものにあらず。もとのごとくに置き給へ。」

「そも、此の衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。」

「悲しやな。羽衣なくては飛行の道もたえ、天上に



歸らんことも
叶ふまじ。さ
りとしては返し
たび給へ。」

此の御詞を聞
くよりも、愈、白
龍力を得、固よ

り此の身は心なきあまの羽衣取隠し、叶ふまじ。」とて
立退けば、今はさながら天人も羽なき鳥のごとくに

て、あがらんとすれば衣なし、地にまた住めば下界なり。とやあらん、かくやあらんと悲しめど、白龍衣を返さねば力及ばず、せんかたもなみだの露の玉鬘、かざしの花もしをくと、天人の五衰も目の前に見えてあさましや。

天の原ふりさけ見れば霞たつ雲路まどひてゆくへ知らずも。住み馴れし空にいつしか行く雲の羨ましき景色かな。迦陵頻伽の馴れくし聲、今更にわづかなる鴈がねの歸りゆく天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗のおきつ浪、往くか、還るか。春風の空に

吹くまでなつかしや。

「いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候程に、衣を返し申さうざるにて候。」

「あら嬉しや。此方へ賜はり候へ。」

「暫く。承り及びたる天人の舞樂、唯今こゝにて奏し給はゞ、衣を返し申すべし。」

「うれしや。さては、天上に歸らんことを得たり。この喜に、とてもさらば人間の御遊の形見の舞、月宮を廻らす舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ、世のりき人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶

ふまじ。さりとは、まづ返し給へ。

「いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさて、そのままに天にやあがり給ふべき。」

「いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。」

「あらはづかしや。さらば。」

とて羽衣を返し與ふれば、少女は衣を著しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、天の羽衣風に和し、雨に濕ふ花の袖、一曲をかたて舞ふとかや。東遊の駿河舞、此の時や始なるらん。

それ久堅のあめといつば、二神出世のいにしへ、十方

春霞たなび
きにけり久
方の月の桂
の花や咲く
らん。
天つ風雲の
通路ふきと
ちよ少女の
姿しばしと
どめん。

世界を定めしに、空は限りもなければとて、ひさかたのそらとは名づけたり。然るに月宮殿の有様、玉斧の修理とこしなへにして、白衣・黒衣の天人の數を三五にわかたつて一月夜々のあまをとめ、奉仕を定め、役をなす。我も數ある天少女、月の桂の身をわけて、假に東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。春霞たなびきにけり、ひさかたの月のかつらの花や咲く。げに花かづら、色めくは春のしるしかや。面白や、天ならでこゝも妙なり。天つ風雲の通路吹きとちよ。少女の姿しばしとどまりて、此の松原の春の色をみほ

*君が代は天の羽衣まれにきてなづともつさぬいはほなるらん。

がさき。月きよみがた富士の雪、いづれや春の曙。たぐひなみも松風ものどかなる浦の有様。其の上、天地は何を隔てん、玉垣の内外の神のみすゑにて、月も曇らぬ日の本や。君が代は、あまの羽衣まれにきて、撫づとも盡きぬいはほぞと聞くも妙なり、東歌。聲そへてかずくの笙、笛、琴、篳篥、孤雲の外にみちみちて、落日の紅はそめいろの山をうつして、緑は波にうき鳥がはらふ嵐に花ふりて、實に雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。南無歸命月天子、本地大勢至。東遊の舞の曲。あるひは天つみそらの緑の衣、又は

三五夜中新月色二千里外故人心。

春たつ霞の衣。色香もたへなり、少女のもすそ。左右左さいう颯々の花をかざしのあまの羽袖。なびくもかへすも舞の袖。東遊のかずくに、其の名も月の宮人は、三五夜中のそらに、又満願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さる程に、時移つて天の羽衣浦風にたなびきたなびく三保の松原、浮島が雲のあしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つ御空の霞にまぎれて失せにけり。(觀世流謠曲)

二二 鎌倉室町時代の文學

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに一變す。公卿は政權を失ふと共に意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども、文事に疏く、庶民は數度の戰亂に、疲勞し困憊して生活に餘裕なし。従つて當代の文學に雄篇傑作の多からざりしは亦已むを得ざる所なり。當時、専ら武家の祐筆となり參謀となりて文筆に従事したる者は僧侶にして、純文學の如きも多くは其の手に成れり。されば、此の時代の文學に佛敎的傾

向の存すること、平安朝よりも甚だしく、到るところに無常輪迴の思想を見るは、一は僧侶の手に成れるがため、一は時勢の然らしめし所にして、實に當時の頻繁なる變亂は、社會をして自ら厭世に傾かしめ、盛者必衰會者定離の觀念の、深く人心の根柢に染みたること、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。漢學は平安朝の半ば頃より漸く衰へ、上流の人は尙これを第一の學問となせども、多くは純粹なる漢文を書き得ず、こゝに和漢混交の一種特別なる文體を生ぜり。この文體を以て記したるものにて、最初に

成功したるは蓋し方丈記なるべし。方丈記は、鴨長明が、源平の紛擾たえまなき世を厭ひて、山城の日野に隠棲せることを記せる短篇にして、文辭の流暢なるを以て顯はる。

更に、和漢混交體の大いに光彩を放ちたるは、源平争鬪の次第顛末を記したる軍記類なり。抑、源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものをして自ら一種悲壯の感に打たれざるを得ざらしむ。こゝに於てか軍記の作あり。その最初に出でたるものは保元・平治の兩物語にして共に簡勁を以て勝れた

り。ついで出でたる平家物語は、蓋し曲節を附して諷誦せんが爲に作られしものなるべく、縦に雄大悲壯なる戦記を以て貫き、横に哀憐優雅なる物語を錯綜して、其の間にまた幽玄奥妙の佛教趣味を點綴す。されば治承の春を名残に、壽永の秋を西國として落ちゆける、夢よりも果敢なき平家一門が榮枯盛衰の記述には、言々涙あり、句々同情あり、讀む人をして、讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて、佛道に歸入せしめずんばやまざらんとす。その冒頭を、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者

必滅の理を現はす。といふに起して、最後の巻には、建禮門院が後白河法皇への物語に、其の経過せる一生を六道に譬へたまへりといふに考へても、以て其の全豹を推すに足るべし。

源平盛衰記は平家物語に比してその記事更に詳密なり。文章頗る華麗にして漢語を交ふること平家より遙かに多し。太平記は平家物語に倣ひて作れるものにして、後醍醐天皇の即位に筆を起し、爾後五十年間の戦亂の始末を記述す。中興の事業に多大の同情と尊敬とを捧げて起ち、數多の忠孝節義の士

が事蹟を點綴して、其の間に倫理的、宗教的觀念を鼓吹せるを見る。文體は漢語を用ふること更に著しく、文脈はた漢文調を加へたり。

是等のものと稍其の趣を異にし、率直平易なる文體にて書ける散文に、十訓抄古今著聞集宇治拾遺物語あり。いづれも平安朝の今昔物語等に倣ひて、古來の面白く珍らしき事實を輯めたるものなり。

徒然草は兼好法師の作にして、その趣味を談じ、世態人情を説く間に、著者が修得せる道佛主義の眼鏡によりて、よく皮相の虚飾を透して隠れたる社會の裏

面を洞察し、爬羅剔抉、痛快にそが矛盾撞著のあるところを暴露せり。文章亦暢達にして雅馴、交ふるに奇句警語の天外より落ち來るものを以てし、かの枕草子と併せて世に隨筆の雙絶と稱せらる。此の外、歴史としては神皇正統記、増鏡等最も見るべし。神皇正統記は准后北畠親房の著にして、建武中興の業破れて王道の衰頽せるを憤慨し、古の歴史に照して皇統の正閏を論じ、三種の神器の在るところ即ち名分の存するところなるを疾呼せるものなり。實に國文を以て綴れる議論文の權輿ともいふべく、

婉曲なる語句のうちに博大なる氣格を藏して、堂々としてまた朗々たり。増鏡は後鳥羽天皇御即位の始より、後醍醐天皇が隱岐より還幸せられしまで、凡そ百五十年間の事蹟を記述せり。記事客觀的にして、毫も著者の主張を交へず。文章流麗にして、よくその模範たる榮華物語を凌ぎ、大鏡の壘にも接せんとす。世に水鏡・大鏡と並べて三鏡と稱せらる。和歌は其の初期に於て最も盛にして、元久二年には後鳥羽上皇の敕により、藤原家隆等新古今和歌集を撰せり。延喜以降、和歌の敕撰實に八度に及びしが、

就中古今と新古今と殊に勝れたり。新古今は其の名の示す如く、よく古今を改造して、加ふるに客觀的敘景の新調を以てし、別途に比較的圓滿なる發達を遂げたるものといふべく、句調流麗、その新奇なることも前古比なしと稱せらる。従つて當時有名なる歌人亦決して少からず。まづ俊成あり、隆信あり、西行あり、寂蓮あり。關白良經は天授の才を以て時流の歌を詠じ、將軍實朝は萬葉の古調を喜びて金槐集を作る。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽一世に高く、前者が措辭の巧緻を喜べば、後者は最

も暢達の調を尙べり。

室町幕府の世になりては、戰亂相繼ぎて鄰戰遠攻に干戈相見えざる日とはなし。一時小康を見たる義滿の代の如き、實は大風到らんとして暫く平穩を持する時の如きのみ。永享に嘉吉に一波は一波より甚だしく、應仁の亂に及びては、遂に急潮突破して、風伯叫び、電將狂ひ、雷神轟く大混亂、京都を中心として天下をこの混沌溟濛の裡に漂はすこと前後百餘年、上下擧つてその堵に安んずることを得ず、怨嗟の聲うたゝ、四方に満ちぬ。艷麗なる百花は平和なる

春にこそ咲き誇れ、かくすさまじき亂離の秋にいか
でか榮えん。されば文學の如き、全く度外に置かれ
て、毫も發達すべき餘裕を存せざりしなり。
されど應仁の亂までは、流石に幕威尙地に落ちず、殊
に將軍義満は、柔弱にして遊樂を好み、義政は戰亂に
遭へりと雖も社會の辛酸を知らざるが如く、それぞ
れ閑居を設けて文雅風流を樂しめり。されば水墨
の繪香茶の技などの發達せしもこの時にして、能樂
の勃興に伴ひて當代唯一の文學謠曲を生じたる、實
に此の時代なりとす。

謠曲は蓋し當時の僧侶の手になりしもの多かるべ
く、その中多く佛教の思想を含む。趣向は幽靈顯は
れて往事を語り、巡錫の途なる名僧知識の回向によ
りて成佛するもの多數を占む。詞句は好んで古文
辭を補綴すれども、よく皆諧和して球を轉ずる如き
好調に富む。

能樂の餘興に狂言といふものあり。その技、能樂の
嚴正なるに對して滑稽を旨とし、多くは罪もなき失
策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの
多く、巧に人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色、よく

明治三十六年五月八日發行
 明治三十七年二月廿六日發行
 明治三十八年二月廿九日發行
 明治三十九年二月廿九日發行
 明治四十年二月廿九日發行
 明治四十二年三月八日發行
 明治四十四年二月廿六日發行
 明治四十五年二月廿六日發行
 明治四十六年二月廿六日發行
 大正四年十月三十日發行
 大正六年六月三十日發行
 大正七年十月三十日發行



編者 吉田彌平
 發行所 光風館書店
 印刷者 四海民藏

東京市小石川區高田老松町五十二番地
 東京市神田區裏神保町六番地
 東京市神田區裏神保町六番地
 東京市神田區裏神保町六番地

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
 賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候は、直に御送附可致候

東京英書一工場印刷

師範國文教科書 本科用 卷五

定價金 三拾五錢
 臨時定價金 四拾錢

人の頤を解かしむるものあり。その文は當時の言
 語をその儘に寫せるものにして率直愛すべし。
 之を要するに、この時代は多少特色ある文學を産ぜ
 ざりしにはあらざれども、上に平安朝を承けてその
 後殿たり、下に江戸時代を起すべき先驅たり、まづは
 兩盛時を繋ぐ連鎖たる時代と謂ふべし。

(日本文學史教科書に據る)

鎌倉時代の源氏物語
 室町時代の源氏物語
 江戸時代の源氏物語

師範學校 國文教科書 本科用 卷五終

